
天翔ける星たち

レイター西

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天翔ける星たち

【Nコード】

N4271C

【作者名】

ライター西

【あらすじ】

亜空間発生装置が開発され調査団が行方不明そんな最中知らず軍に入るラーニヤの運命は、、、

第1話

第1章

激しい爆発 砕け散る壁 閃光 人の叫び声 敵戦艦に強襲艦が突入
ここは、亜空間 ミサイルもレーザさえもともに打てない空間

人類が、亜空間発生装置を開発研究 発見 確認してから3ヶ月
第1陣調査団が投入された

調査は順調に行われたしかし何かを見たとの連絡後 消息は途絶えた。

その後調査団は結論を、だした 亜空間に敵がいるらしい。人類は
震撼した。 知的生物など今まで見たことが宇宙ではなかったから
である

軍は、急遽この後この宇宙空間に広がる亜空間発生装置を戦艦 エーヴア 要
塞で取り囲んだ
まだ、敵が何なのかも知らずに、、

第1章

そのころ、コロニーでは新しい軍の人員を募集していて 最近特に
軍は一般の人員を集めるのが多くなっていた。

次の方、ラーニヤ・マロンさんですね 宇宙生物研究部門ですね。
ここでのよろしいですか？

あ、あ はい そこでおねがいします。

ラーニヤは小柄な女性だった あまり仕事に興味がなく このあま
り出番がなさそうなこの仕事で静かに暮らそうと思っていた。

ラーニヤ　ラーニヤ　受付が終わったあとラーニヤを呼ぶ声が聞こえた。

友達のマールだ。　ラーニヤ決まったかいあたしゃー海兵隊だよ
ロケットランチャーを撃ってドカドカやるんだ　あははー
マールとは、昔からの友人だった。軍に入ったのも彼女のせいだったのかもしれない？

後　父親から逃げたかったのが一番だった
しかし　どうしても海兵隊志願の彼女には体力的についていけそうになかった

頼むから私に向かってうたないでね。　後どこかで同じ仕事ができるといいね

おおそうだな　あははー　マールは言った　就職祝いだ今夜は飲むぞー　ガンガンは飲むぞー

いい男連れてくるからさー　6時だよおくれんなよ　そういい残してその場を別れた

彼女マールは男まさりな性格をもちつつも世話好きな性格でよく今まで助けてくれたことも多かった。

その後　ラーニヤは、軍の実務担当者のレクチャーを受け　その他もろもろの講習を受けた

それから今日の実務を終え6時　約束の店に着いた。

マールは青くなっていた　どうしたのマール？ラーニヤは言ったそしてマールが見ていた

空間TVに目を向けた。そこでは軍の艦隊が多大な攻撃を受け燃えさかるニュースが流れていた

ひどい有様で、軍の最新鋭母艦が砕け散るさまが録画されていた

ごめんラーニヤもしかしたら私とんでもないときに軍に入ったのかもしれない

あなた、もしかしたら軍に入っただのは私の影響だと思っていたのでも死ぬわけないし別にいいかなーと　けど最近のうわさで話　軍やばいらしいのだからあんな大々的に採用してたのね。
おかしなーと思っていたけど　昔から父さんたちも軍人で夢だったの　私は特殊兵科も習ってるしの知ってるでしょ

実はこのときまで　軍はあまり亜空間の出来事を大げさにせず人類の敵がたいしたことがないような情報操作がなされていたのだった
しかしこのときだれもがこの敵についてはじめて恐怖の対象としてとらえたときでもあった

第2章

それから、数日後　父親と家族の反対を押しつけ　ラーニヤは軍のトレーニングセンターに来ていた。

普通ならここでトレーニングをするのだろうがほぼ全員第8コロニー^{エーヴア}亜空間発生装置のそばに送るとというのが軍の方針らしい。輸送艦離発着場もすぐだった

そこには、マールの姿もあった

よう　いたいたマールがそばに来た　マールの話では、1500人ごとで輸送艦に適当に乗っついていらしいのよ

3番艦と一緒にどうお嬢さん　マールが言った　よろしく願いますわ　ラーニヤ達は、まるで修学旅行でも行こうかの気持ちでいた輸送艦に乗り宇宙の景色を眺めることそれから3時間後　乗った後気づいたのだがやたらほかの艦と密集して航行しているのである
やたら近いわねマール　そう？何番艦かわからないけど向こうの窓の人見えそう　マールは言ったみえないわよー馬鹿じゃない？
そのとき

ものすごい爆発音が聞こえた　どよめく乗員　みる　みる　どこからか声が聞こえた　うちの後ろの艦攻撃を受けてる　なんだありや怪物か？まるでありやタコか？機械ぽいな。でかいぞ

私からでは見えない　ただ爆発音と艦内放送の頭を下げてシートベルトをつけるとの声がこだましていた

今まで味わったことない急加速、急旋回、急制動、何かから逃げるしかわからない。

船体がきしみ何かが当たる音　時々悲鳴　たすけてー初めての死の恐怖

マールが手を握ってくれこういった助かるわよ　私運いいから

それからどのくらい経ったのだろう　また爆発音が聞こえた　そしてだれかが味方が来たぞーとの声助かったの？　顔を上げた艦内アナウンスが聞こえた　危険は去りました　今しばらく落ち着いてください　見方の駆逐艦が敵と交戦中　もう少しで第8コロニーです

助かったという安堵感　何で教えてないのという不安感　そんな気持ちで第8コロニーに着いた

第3章

コロニーについてわかったが、1番艦、2番艦、12番艦は、撃破されていた

戦闘航行中に当たるような音は、1、2番艦の残骸だった

マールは言った　私飛んでく死体を見た　最悪だったわ　でもこれからよく見そうだわ

あなたは、宇宙生物研究部門だからもつとすごい見そうだわね

ええっ そんなー私は言った　こんなときにこの子はとつよくつねった。

じゃわたしは部屋にいくわ　またねマール　マールと別れた。

初めての一人部屋だが　いろいろありすぎて疲れて眠ってしまった

次の日　宇宙生物研究部門

はじめまして　私、ラーニヤ・マロンといいますよろしくおねがいします。

新人さん、挨拶はいいからこれをもって2番駆逐艦に行ってくれ
そこで挨拶してくれと紙と鞆をもらった　おお、重いわね私は言われたとおり2番駆逐艦に向かった

そこには、腐れ縁　マールがいた　君たちか今度うちの強襲艦の乗組員は、私が二番艦艦長のアーノルドだ。艦長だが　君たちに浣腸はしない　がんばってくれたまえ

さらにアーノルド艦長は言った

なんと君たちの運がいい事に二番艦は新造戦艦である。作られて18年になる。　どこがじゃ　マールが言った

強襲艦は、もらいものだ　一番艦の　ええっ　マールが言った　じやアーノルド艦長ひとつ質問があります一番艦はどうしているのですか？　アーノルドは言った一番艦は今ない　情報部の無理な作戦で爆沈した。今度は俺たちかもしれん

まあ　不安はあるかもしれんがせいぜい逃げぬくことだ　よろしこ
よろしこ

ああ　ここに集まったきみたちは、これからチームだうちの艦から二人ほど紹介しよう　歴戦の勇者　ガル軍曹だ

接近戦は　彼に任せろ　彼がやられたら逃げろということだ

（ガルだよろしこ）

ソナーのマイ　作戦の通信もかねる　（まいでーすよろしこ）

艦長 強襲艦の操舵手は誰です？ マールが言った
アーノルド艦長は言った なに言ってんだお前しかいねー
じゃお前たちも紹介しろ

新人操舵手になりました マール・アシュリーです。よろしく
(艦長がにらむ)

マール・アシュリーです。よろしく

ジョン・ベリー新人です ええ 砲撃手です 後たぶん白兵戦も担当です。 よ、よろしく？

最後になりました宇宙生物研究部門の新人ラーニャ・マロンです。

艦長が言った お前は何をやる係りかな？

だいたいな マールにしても ガルにしてもだ 軍の特殊兵科を受けているがおまえさんはちがう 大体強襲艦とは上官5人で1チームだが、乗組員は35人くらいだ

おまえさんは、昆虫採集 兼 白兵戦妨害担当だ

こ、こ 昆虫採集？ラーニャが言った 敵の死体でも とるんですかさっしがいいなーそうだ 艦長が言った じゃあとは もう一度紹介 ラーニャ・マロンです よろしく よろしく

あまりの雰囲気にもマールが笑った 艦長が言った 後白兵戦は主にマール先頭に行くこと 以上

ええーマールがうなだれた

第4章

場所を変えガル主体で強襲艦の前でブリーフィング

スマンが強襲艦リーダーだがラーニヤでたのむ　ガルが言った本当はこういうのは経験者がするのだが。俺の仲間は戦死したしおれはしたことがないし難しい話や会議はみなわからんからよろしく

（ええーっラーニヤ）

あと　おのほかの乗組員に名前と所属を言っておくようだから
部下をつける１人６人　全部で３０人だ
それからこれが一番大事だが・・・
艦の名前だ　どうする？

ガルの意見　おれは、ドクロ　ドクロでどうだ？　（みんなで
いやあーよ）

ジヨンの意見　自分は、ジャスティス　（みんなでかたいなーな
んかいやだな）

マイの意見　わーたーしは　エルメス　（なんかどつかで聞いた
ガン　ムみたいでやだなひそひそ）

ラーニヤ意見　マール（本人目の前じゃいやだな　自爆しそうヒ
ソヒソ）

マールなんだとー（怒）

マール意見　フェ　フェアリー（は　はずかしいヒソヒソ）
マールなんだとー（怒）

ガル　じゃドクロで決まりな　（一同イヤー）

じゃフェアリーでラーニヤが言った（もういいや あきらめ一同）

ガル じゃドクロことフェアリーな（ドクロ要らん一同）

そんなさなか艦長は、ほかの艦長と深刻な話をしていた アーノルド艦長聞いてくれ

やつら 宇宙戦では駆逐艦五隻相手に一隻で、互角と来てやがる
エーヴアを即刻破壊するべきだそうすればやつらはこれなくなる
だが情報部の話では一度こちらの存在を知った以上また来ると見て
いる どうしたらいいんだ

アーノルドは言ったとりあえず うちらが亜空間探査に行くらしい
それまで待つてくれ

あまり期待してもらっても困るが よろしくたのむよ

2ヶ月ぐらいをめどにいつてくる こんなこと話してもしょうがな
いだろいかにやわからん

もしかしたら敵本拠地がわかるかもしれん 多分 殺されるが ま
あそんなところだ

通信切るぞ また酒でもおごってもらうよいつか じゃーな

1時間後 アーノルド艦長は、頭をかきながら 明日ひとよんま
るまる時に亜空間に行くよん全強襲艦リーダーに物資運搬しとくよ
う通信用イヤーピースに連絡してきた
それからわしゃ寝ると。

次の日 13:00 ついに、亜空間に旅たつときが来た 艦隊編
成2番艦のみと言うとんでもない編成だった

軍情報部、軍本部は、二番艦が帰ってこないことを予想していた
しかし そのことを 二番艦では、アーノルドしか知らされてい
ないのであった

ひとよんまるまる時　いくぞ　ついに突入が開始された。
エーヴァはとんでもなくでかく見るものすべて人間の偉大さを感じさせるものだった

その後二番艦は、亜空間発生装置エーヴァの中心に待機　その後渦巻く水のような中に入っていくのだった。

一瞬目が見えなくなりますので目をつぶり携帯用電磁ベルトをご使用ください

これといって亜空間は、ただガラスが舞うみたいにきらきらしていて見かけ上は、宇宙空間とあまり変わりがないとこだが　世界が時よりゆがむような目の錯覚におちいる場所だった

第5章

三日後、外を眺めるガルにラーニヤが言った　ところで亜空間って宇宙空間とどこが違うのですか？

ガルが言った　基本的には宇宙空間に似ているがどこだか位置がワカラネイ　光が少しなぜか屈折するからそばしか光学武器もろくにつかえない　戦いは白兵戦が主だ　艦隊戦はできない

ほら戦艦にヒモついてるだろ　あれ　ビーグといってなあれの範囲しか動けない　あの範囲を拡大するのも俺たちの仕事さ　あのヒモは特殊光学繊維でなそこらじゅうにつけて回れるんだ戦闘中は当然切る　でないとひっかかるからな　簡単な話　犬が縄張りを広げる方法に似ている

マーキングだ　でもあれを見失ったが最後だ　補給物資もあれで送られる　生命線だな

あと　すまんが何もわからんのがここさ　いろんなことがうけうりでわからん　いいかなこんなんでも聞いてるさなかいきなり船が揺れた

ついに 警告音がなった 亜空間航行上に敵機動要塞発見 攻撃を受けました 強襲艦クルーは直ちに発艦してください

強襲艦連絡用端末にも強襲艦フェアリーただいま準備中 5分後発進しますとの連絡

かけこんできた ラーニヤ、ガル軍曹

デートしてたか おそいぞ マールが怒る

全員乗ったか よーし フェアリー発進 激しい加速音の中気がつく とそこは わが軍の強襲艦であふれていた

こんなにいたのね ラーニヤが言った

ソナーマイが通信を受けた 敵大型艦発進 どうやら逃げるらしい

全 強襲艦 突撃、

白兵戦用意とのこと いきなりの白兵戦未知との戦いが切つて落とされた

そこには、わが部隊が巨大なパンに爪楊枝を立てるように飛び込んで行った。

敵艦は超大型、要塞から離脱 抵抗もそんなになさそうだった

ガルが言った おーし俺らも刺さるぞ 前面電磁隔壁用意 突撃開始

すると以外に吸いこまれるよう敵艦に食い込んだ 科学の勝利だ突っ込むぞ。すさまじい銃声音 奇怪な声 そこにまるで くらげみたいに透きとる人の様なものが銃らしきものを撃ってきた。ガルはすばやくその敵に銃を撃ち込んだ いまだっーとのかけ声の中

わたしたちは、とにかくこの突撃艦の入りを確保するのだった 自動機銃セットよし

突入煙幕よしゴーグルよし 突入10分後 激戦の最中 通信で敵

戦艦 艦橋を破壊したとのこと
ガル（ここは、なにもなかった少しずつ下がるぞ）

撤収命令が下された あれっラーニヤは、大きな箱を見つけた そのなかには 透明な肌の少女がうずくまっていた 後方にいたラーニヤはとっさに移動端末で仲間のゴーグルにアクセス 味方の位置を確認、さらに煙幕で視認性をほぼゼロにして強襲艦の格納庫に少女を隠してしまった

隠し終えたころマールがラーニヤのそばにきた 心配したわよ どれで行ったの？ マールが駆けつけた 煙幕たき過ぎ あんたの部下もパニックだったわ 何考えているの 後 死体拾った？ 一体強襲艦の近くにあったから 部下に運ばせなさい。

それから 20分経っただろうが 二番艦にもどってきた マールにも誰にも少女のことは言わずに

第2話

第6章

あれから ブリーフィングが終わり2時間後、強襲艦格納庫に急ぐラ・ニヤの姿があった

ええっと わたしの暗証番号確か1234？ あ あいた そこには静かにねむる少女の姿があった たしかに透けているようだけど透けてはいないわ 光が屈折している？

きれーい 肌触りは、赤ちゃんみたい まさかこれで人を食べるとか変身するのかなさそう

わたしは、その子を担架に乗せシートをかけ と出ようとするともールが銃を持って立っていた。 あんたその死体どうする気？

しかも さっき拾ったと思われる死体はもっと大きかったわと シートをめくった な なにこれは あんた自分がなにやってるかわかっているの？ 言葉を失う2人 しかし数秒後

かっかわいーい マールの意外な反応にラーニヤは驚いた あまり可愛いといわないマールが可愛いといったので

いまだ いま説得するしかない 殺すのマールこんな天使を 親友の私を艦長言いつけるのといったらすぐ肩を落として殺したくないんでしょ そして マールは言った わかったわ誰にも言わないでも危険かもしれないからとりあえず隔離して

あとわかるわよねー見つかったら軍法会議行きだわ

マール先導の中自分の部屋の研究室に少女をいれた そんな時少女が起きた 少女はあわててシートをかぶり 目をすこしだけだしてこつちをみるのだった。

しかし、マールが頭をなでると震えていた少女がすこしずつ落ち着いてきた

少女は、なにやらしゃべるが 意味がわからない。

こんなときはやっぱ食いいもんだなとりあえずいろいろ持ってきてやる マールが出かけかけた

そのとき 少女は、わたしのへやの飲みかけの牛乳を指差すのだった

すこしだけやつてみるよ 出かけかけたマールが言った 飲んでるが 大丈夫かなー？

でも少し少女は首をかしげるのだった。なんか似た飲み物があるんだラーニヤは、言った

マールはそれからすぐ強襲艦の整備に向かった。

わたしは、できる限りの会話を試みた 少女が身振り手振りで言うには、お父さん、お母さんは、一緒にいなかったみたいだ。じゃどうしてあそこに それは、わからなかった

第7章

また 3日後 警報が鳴った 敵戦闘艦発見、ただちに強襲艦持ち場についてくださいなお発進はしません 発進はしません。

強襲艦移動後、ガルは 怒っていた一体何が起こつてんだよわからないよ

揺れる船体時々の爆発 それから 1時間ほど経ってからだった えー艦長アーノルドだ 先ほどの戦闘で我々は十数隻の戦艦から逃げ切った しかしその代償にビーグ（ヒモ）を失った 今からビーグをここから引く ほかに手段がないのだ じゃーそうゆうことで

通信終わる

ここから 近くの天体からビーグを引くのはただまたここに戻らないだけにすぎない

あっさりとした話だったが大変な内容だった 家に帰る手段がなくなり補給が出きないこと

クルーには、絶望的な空気が流れていた

警報が解除され交代で自分の部屋に帰ったときラーニヤは研究室で寝転ぶ少女を見た。

この短時間で少女はいろいろ意思の伝え方を覚えた。

少女はいきなり走り込みラーニヤに抱きつくのだった。

さみしかった？ ラーニヤは問いかけた 首をかしげる少女

ラーニヤは、おもった わからんとき首をかしげるのは全宇宙共通？

実はビーグが切れたことでよいことがひとつあった それは、ラーニヤの研究資料を送らなくてよく ラーニヤが暇になって少女と遊べる機会が増えたことだった

よし 今度はこれよ 空間TVの検索サイトに牛を表示 少女が気持ち悪がる

やっぱこれじゃないか？ まさかその乳を飲んでは思うまい

少女がTVに触ったとき虫が、表示された 叫び声を上げる少女

これもいないのね？ 一体どんな星かしら？ 機械惑星なんてであるわけないな

機嫌を取り直し微笑む少女にただ ラーニヤは 笑みを浮かべていた

第九章

全、強襲艦リーダーにお伝えします第2ブロック会議室へ全員集合願います

ラーニヤは、いそいそと出かけた 会議の内容はこうだった

近くの天体に自動生産工場を作りとりあえずの戦艦のエネルギーを確保 ビーグをひくとのことだった

強襲艦メンバーを集めそのときは来た 降下始め すさまじい速さで降下する強襲艦

全員顔をよがめる数十秒後 地面に降下成功した

ほら時間がないぞこんなとき敵に見つかったら置いてかれるぞ 急いで分担しての作業に取り掛かった 数時間後、戦艦から通信を受けた あー艦長のアーノルドだ

すまん　すでに敵見つかった　完全に包囲されてる　今のうちに作業をやめないと置いてけぼりになるぞ　まあ上がってもどうなるかわからんが　そこだと3日だな
全員撤収、それしかなかった

戦艦に戻るとそこは異様な緊張感がある空間になっていた　20分後、そんななか艦内放送が流れた
あー艦長だが、現在の状況だがはつきり言っと包囲されたが敵さん何も言ってこない　攻撃もされない
どうしよう？　とのこと　そいだから少し動いてみようと思うが
どうだろう？

いい加減この艦長にもうんざりしてきた　マールが言った　死ぬ気？
包囲されて撃たれない理由なんてあるの？　そういつたときマールは私の顔を見つめた

まさか？マールがラーニヤに耳打ちする　ミルク少女？まさかーでもほかに理由がなかった

そろそろネタばれでいいじゃないマールが言った　いきなり殺されないわよ　みんな命がかかっている

しかたなくラーニヤは、艦橋に少女を連れて行った　おののく船員
ややすけるような肌は妖精のようだった。

艦長ウィルス及び危険性はありません　たぶん敵が撃ってこないのはこの子のおかげかも

艦長は少し悩んだ後　一言言った　あー艦　艦首にカプセルデッキがあるそこでやつらにこの子を見せて様子を見よう

ラーニヤは、言われたとおりカプセルデッキで少女を敵に見える位置に自分と一緒に立たせた

数秒後　何隻居たのかわからない敵が　肉眼でも急速に逃げ出すの

が見えた

迎えに来たのじゃないの？ 王女とか？ 王女とかあー？ラーニヤ

はつぶやいた

しばらくして 艦橋に戻ると歓声が聞こえた 絶望から希望に変わったからである

1時間もたないうちに艦内にこのことが伝わった 少女はもう2番艦のアイドルになっていた

第3話（前書き）

未知との敵との遭遇の中すこしずつわかりだす少女の秘密

第3話

第10章

艦長 逃げる敵軍追う艦長 あはは面白いなぜだかわからないがここまで逃げるかー

よし元ルートでビーグをさがそう 敵が逃げしてくれるなら ここは博打で戻るしかないからう

それから 二度ほど敵軍に会ったが逃げるだけの敵軍に少女の不思議さが増していた

ジョンが言った

ラーニヤさんあ、あのうやっぱあの子と こないだ白兵戦で戦った人たちと明らかに違いますよね。

ラーニヤ そう そうなのよあの子 私たちにとっても容姿が近いのでもこないだ戦った人には髪がなかった耳が大きかった。目が尖ってた第1研究室にある死体とも似ても似つかない

とてもかわいいのよーー

ジョン あとあるんですか？

ラーニヤ なにがよ？

ジョン あれですよ

ラーニヤ はあ？

ラーニヤ まさかそんなこと聞くのあつあるわよ 下のこと 当然

女の子よ お風呂も入れるわ

ジョン うっほーい飛び跳ねて消えてゆく

ラーニヤ しまったーあいつロリコンか？未知でも可愛けりやいいのか？教えんほうがよかったか？まじめそうだからついほんとの事を・・・

それから 数時間後 敵のただ中だったが艦内では今まで感じたことがない異様な空気が流れていた。

それでは発表します 第一位 ミルフィー
ミルフィーに決定しました

ラーニヤ 何の騒ぎ？ マールが言った あれ知らなかった？ミルク少女の名前よミルフィー
だそうよ よかったねミルフィーちゃんこれからもよろしくね

騒ぎが収まり私は、艦長に呼ばれた 艦長が いきなりですまないがラーニヤ ミルフィーだったかな

君はあの子をどう思うかね？ おかげでたすかったが君はかなり危険なことをしたのだよ

許されることじゃない 意見を聞かせてくれ

ラーニヤは、言った すいませんあの時私はあの子を見たときなぜか敵とは思えず助けたいと思ってしまった それは今でも後悔してません けど あとで敵を見て思ったんです
ぜんぜん種族が違う あの子が特別なのはわかりますが逃げるようにいく

包囲もされない 奪還の兆しさえ見れない どちらかというところの

子は恐怖の対象みたいな・

頭がよいのもう少しで身振り手振りで話せそうです とても私になつています

まかせてもらえますか？

艦長 任せんといつてもだめだろうが少しでも私たちが生き残れるようにがんばってくださいよ

あと ミルフィーの写真をくれ

ラーニヤ はあ？（内心あまりの人気の高さに戸惑った）

ラーニヤ 部屋に帰るとミルフィーが、オートミールをいじってた
もうわかるの？

ミルフィー うなずく
ミルフィー ご は ん？ラーニヤは た べ りゆ？ た
べる？

ラーニヤ 食べる 食べる

ミルフィー わたし ちきゅうしってる

ラーニヤ とつぜんなに？ 地球？ よく知ってるね びっくり

ミルフィー そう私 地球知ってる 私宇宙

ラーニヤ 宇宙？ 宇宙人てこと？

ミルフィー 違う 私宇宙 私神様

ミルフィーは、手の中に私たちがよく知ってる銀河系を小さなサイ
ズで出して見せた

ラーニャ キレイイすごい でも 神様だかなんだか知らないけど
ほかの人に見せちゃだめよ

そんなことをいいながらも自分の考える常識が通じないのだと感
じた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4271c/>

天翔ける星たち

2010年10月22日02時18分発行